

佐藤成広作 「自殺2」

効果音 (踏み切りの警報機の音。そこに向かいゆっくり歩いてくる足音。)

山田守 危ない！

効果音 (踏み切りへ走る足音。悲鳴。電車の去る音。)

前田二郎 いてえ！ チクショー！

守 おい、大丈夫か？ ケガはないか？ どうして…？

二郎 うるせえなあ。死なせてくれよ。おれなんかほっといてくれりゃいいんだよ。

通行人 まあ！ 自分を助けてくれた人に対して、なんて言い草でしょ。憎たらしい。

二郎 なんだと?!

通行人 わたしにまで突っかかるつもりなの？ あんたみたいな不良学生なんか、死んじゃったほうがほかの生徒のためになるのよ。

二郎 あんたみたいな教育ママがいるから不良が出るんじゃねえのかよ。

通行人 なんですって！

守 もうやめてください。あなたも人の子の親なら、そう言う言葉がどれほど人を傷つけるか、分かっておられるでしょう？

通行人 まあ！ 2人がかりでわたしを責めるつもりなの？ ひどいわ。

効果音 (足早に去る足音)

二郎 なんておれなんかかばったんだよ。ほっときゃいいんだよ。

守 あんまり向こうがひどいこと言うもんだからさ。

二郎 ありがとよ。それじゃおれは帰るぜ。あばよ。

守 おい、待ってくれ。聞かせてくれないか、君のこと？ そうだ、まだ名前聞いてなかった。おれ、守っていうんだ。よろしくな。

二郎 ああ、おれは二郎ってんだ。

守 この近くに住んでるのか？

二郎 ああ。おいお前、足どうしたんだ？ ちょっと見せてみる。

守 いや、大丈夫だ。ちょっとぶつけただけさ。君が助かったんだから、このくらいのケガ、なんともないよ。

二郎 お前…。お前みたいなやつを見たのは生まれて初めてだ。おれの周りのやつなんか、だれもおれのことなんか考えねえんだから。おれが2年になった時、クラスには知ってるやつがだれもいなかった。だから、クラスのやつらとはほとんど何も話さなかった。クラスのやつらもおれを無視するようになった。そんな時だった——。

音楽 (ブリッジ 回想)

二郎 ちょっと電卓貸してくれないかなあ。

荻野洋子 ええ、いいわよ。わたしの机の中に入ってるから、探してみて。

二郎 ありがとう。

荻野淳子 (小声で)ねえねえヨッコ、前田君に物貸しちゃダメよ。

斎藤修 そうだそうだ。絶対ダメだよ。

洋子 なんで？

淳子 ヨッコ、あの事件知らないの？

洋子 どんなこと？

修 そうか、ヨッコは知らないかもしれないな。だってヨッコ、1年の時I組だったから。

洋子 だから何よ？

淳子 あのね、前田君はね。

修 前科者なんだ。

洋子 え？ 今なんて言ったの？

淳子 前田君は前科者だって言ったのよ。

修 (意地悪そうに) そう、前田は前科者なんだ。

洋子 それで一体前田君が何をしたって言うの？

淳子 盗みよ。クラスの人のお財布からお金を盗んだのよ。

修 自分が盗まれたから、ほかの人のものを盗んだって話だけど、どうかな。実は自分はお金なんか盗まれていなかったのかも。

淳子 自分にかかっている疑いを晴らすために仕組んだのかもよ。

修 ねえねえ、ちょっと推理小説みたいじゃないか？

淳子 でも、きっとそうに違いないわ。だからさ、ヨッコ、あんな人に物貸しちゃダメよ。

修 そう。絶対ダメだよ。

二郎 ねえ、電卓どこにあるの？

淳子 ヨッコ、やられたかもよ。

洋子 確か机の中に入れといたはずなんだけど…。(机の中を探る音) おかしいわねえ。

淳子 前田君、あなたが取ったんでしょう？

修 今度はだまされないぞ。さあ、潔く洋子の電卓を出せよ。

二郎 なんの話だよ？ おれが取ったっていうのかい？ 誤解だよ。

淳子 そうかしら？ 前科者の言うことなんか当てにできないわよね。さあ、斎藤君たちも手伝って。前田君の持ち物を調べるのよ。

二郎 おい！ 一体何のマネだ？ おれがいつ人のものを取ったっていうんだよ。

淳子 1年の時、人の財布を取ったでしょう？ 分かっているんだから。

二郎 え？ あ、あれは…。

洋子 弁解なんか聞きたくないわ。前田君てそんな人だったのね。ひどいわ。もう絶交よ！

音楽 (ブリッジ 回想終わり)

二郎 洋子は、おれにとって、クラスの中で本当に話のできる唯一の人だったのに。信じることのできるただ一人の人だったのに。この出来事があったから、彼女もおれから離れていってしまった。みんな自分勝手なんだ！ 彼女だって、おれを利用していただけなんだ。ちょっとしたことで、人なんか、すぐに離れていってしまうんだ。もうだれも信用できない。だれも信じることなんかできない！(エコー)

守 ふーん、そんなことがあったのか。つらかったらうな。だけども、君自身はどうなんだい？ 人に信じてもらうことのできる人間なのかい？

二郎 え？

守 自分がだれも信じることができないからって、死ぬのかい？

二郎 だって、生きてたって苦しいだけじゃないか。おれはずっと洋子たちに陰口を言われて生き

ていかなきゃならないんだぜ。それより、死ねば、死んじゃえば、一切のことから解放される。すばらしいじゃないか。死なせてくれ。そうすれば自由になる。

守 甘えるんじゃないよ！ 自分の意志で生まれてきたとも思ってんのか？ 「何月何日の何時にこの世にお邪魔します」って言って生まれてきたとも思ってんのか？ 「死ねば一切のことから解放される」だと？ 自分勝手もいい加減にしろ。自殺こそ身勝手なことじゃないか。それでよく「みんな自分勝手なんだ」なんて言えたもんだな。

二郎 (間)…確かに自殺は身勝手かもしれない。だけど、それじゃ一体どうすりゃいいんだよ？ 「このまま生きてゆけ」って言うのかよ？ だれもおれの気持ちなんか分かっちゃいないんだよ。おれのことなんかどうでもいいんだよ。

守 でも、君のことを本当に愛していて、見守っていてくださるお方がいるのを知っているかい？

二郎 だれもおれのことなんか愛してないさ。洋子だって去っていつちやったじゃないか。

守 君のために、君以上の苦しみを負って死んでくださった方がいるんだよ。

二郎 おれのために？ ふざけるんじゃないよ。なんでおれのためにだれかが死ななきゃならないんだ？！

守 それは、だれかが身代わりにならなきゃならないほど、君の苦しみが大きいからさ。現に、そのために君は死のうとしたじゃないか。

二郎 それで、一体だれがそんなに苦しんだって言うんだよ？

守 イエス様さ。イエス・キリストだよ。

二郎 おれにキリスト教を押し付けようっていうのかい？ へ！ やめてくれよ。おれは今度こそしじらないように死んでやらあ。そんなもんはおれには関係ねえんだよ。

守 そうか。でももし聞か気があったら僕の話聞いてくれ。君はありもしない疑いをかけた周りの連中を憎んでるね。確かにつらかったろう。だけど、疑われるようなことを以前にやったのはだれだったんだい、二郎君？ 僕も、君も、人間は皆罪びとなんだ。友人の心の悩みよりも、自分の顔のニキビの数のほうが気になるんだ。そんな人間のために、そんな人間に本当の生きがいと喜びを与えるために、イエス様は十字架にかかって死んでくださったんだ。ほら、思い浮かべてごらん。イエス様はざらざらの木でできた十字架に、手のひらを釘でうちつけられたんだ。聞こえるだろう、あの打ちつける音？ (効果音 くぎを打ちつける音) 足も打ちつけられたんだ。そしてつるされた。そして息絶えた…。キリストは、進んで命を捨てられたんだよ。

二郎 なんでキリストはそんなことをしたんだ？

守 それは、神様がわたしたち人間を愛してくださるからなんだ。だから、人間の罪のために身代わり<sup>く</sup>に死んでくださったんだ。人間は神様に創られたんだよ。神様から命を与えられたんだよ。だから神様は、僕たち一人一人をいつも愛しておられるんだ。周りの人たちがみんなが自分のことを無視しているように見えても、神差はいつもいつも君のことを愛して下さっているんだよ。そして、神様から離れている人たちに呼びかけておられるんだ。「わたしのもどに戻ってきなさい」って。

二郎 そ、それは本当のことなのか？

守 本当だとも！ 二郎君、死んじゃいけない。君にはイエス様がついているんだ。少なくとも、それをはっきりと信じられるまで、絶対に死んじゃダメだ！

聖書の言葉 「また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のた

めにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」(コリン  
ト人への手紙第二 5:15)

<完>